

R3年度自己評価結果公表シート

幼保連携型認定こども園亀之森幼稚園かめのもり乳児園

1、本園の教育目標

一人ひとりの子どもの発達過程や個性を把握し、こども園において最適な人的物的環境を常に考え、子どもたちの生活の場としての環境も整え、自立して生きていくための基礎となる力を培う。

- ・自立、共感のバランスが取れた子ども
- ・コミュニケーション能力があり、協同することができる子ども
- ・日常的な自然との関わりを通して、感性豊かな子ども
- ・食の楽しさ・大切さを実感し、心身とも健康な子ども

2、令和3年度、重点的に取り組む目標・計画

幼保連携型認定こども園として五年目を迎えることを意識して、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教職員間や保護者の共通理解をはかる。新園舎をより良い保育に適した施設になるように使い方や室内環境構成を考える。食育について研究する。0～2歳児の育児担当制の保育を細部に渡り検証して充実させる。コロナ禍における衛生管理や健康管理を強化する。

3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取組状況と評価
幼保連携型認定こども園として、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教育・保育課程の編成をして、教職員間や保護者の共通理解をはかる。(継続)	長年実施してきた教育保育課程であっても、今の子ども達にとって有意義な保育であるかを常に教職員間で話し合っている。一方で教育保育課程のねらい等を教職員間でしっかりと共通理解しているかを常に意識する必要がある。教育保育課程を変更する場合、その目的ねらいを保護者に理解できるようにしっかりと伝えることができるかが課題としてあがっており、ドキュメンテーションの充実を計った。コロナ禍で感染対策を考えながらも、子ども達が最大限有意義な経験ができるように常に配慮した。預かり保育のあり方について保育室の使い方(教育時間の保育室との共用等)や遊びの継続について改善を計った。子育て支援の充実に努めたが、コロナ禍で縮小を余儀なくされた部分もある。
平成29年3月に新園舎が竣工したが、実際に使用を始めて、より良い保育に適した施設になるように詳細を立案する。子どもが落ち着いて集中して遊べる環境構成を研究	平成29年4月より新園舎の全面使用を開始した。利便性の追求に偏らず子どもの発達に良い施設を目指すことを視野に入れて改善していきたいが、コロナ禍における衛生強化のための対策を優先した。子ど

する。(継続)	もが落ち着いて集中して遊べるための環境構成については外部専門家の招へいを控え園内研究保育も回数を重ねられなかったため次年度に継続して取り組む。園舎について改善したい点が多々あるが、財政的な問題もあり、具体的な改善にまでは至っていない。
食育(継続)	イチゴ、サツマイモ、夏冬野菜等を園庭内の畑にて栽培して食した。園庭内に畑があることで、日常のお世話や観察が無理なくできた。収穫したものは調理室と連携して調理保育でも使用した。毎日の給食で使用する食器、スプーン、フォーク等を子どもの発達に合わせて細部にこだわり取り揃えている。
幼保連携型こども園として0～2歳児の適切な保育計画を立て実践する。(継続)	一人一人の子どもに合わせた育児担当制の保育で一人一人の日課を定めて、子ども達の情緒が安定して、落ち着いて過ごせる保育を目指し、実践できた。開園4年が過ぎ、認可定員いっぱいの子どもを受け入れたが、質を落とさず保育を実践できた。
新型コロナウイルス感染症対策を始め、衛生管理や健康管理を強化する。	手洗いの仕方やうがいの時のマナー等を看護師等により指導した。一番重要なのは換気と考え、冷暖房時も必ず窓を開け換気に努めた。一方であまりに園児の生活や経験を制約しすぎて保育の質の低下に繋がらないように配慮した。

4、学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

改めて園の教育・保育課程や活動内容を教職員で振り返り、自己評価することで、保育の方向性や課題を客観的に整理して考えることができた。ただ、教育保育課程にしても、活動内容にしても、あくまで、それは手法であり、最終評価は子ども達が園生活を通じてどのような人に成長することができたかである。論に溺れず、しっかり子どもの姿を見ていきたい。

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園として、今の子どもに必要な経験を考え、教育・保育・子育て支援の全体的な計画を立て、教育・保育課程の編成をして、教職員間や保護者の共通理解をはかる。(継続)	コロナ禍であることを配慮しながら、今の子ども達にとって有意義な保育であるかを常に保育者間で話し合うとともに、保育内容や保護者からは見えにくい教育保育課程のねらいをいかに保護者が理解しやすいように伝えるかを検討する。教育課程のみならず、保育標準時間の過ごし方や子育て支援についても検討する。満三歳児保育を実践する。

<p>平成29年3月に新園舎が竣工したが、実際に使用を始めて、より良い保育に適した施設になるように詳細を立案する。子どもが落ち着いて集中して遊べる環境構成を研究する。(継続)</p>	<p>平成29年4月より新園舎の全面使用を開始した。利便性の追求に偏らず子どもの発達に良い施設を目指すことを視野に入れて詳細な部分の使い勝手を検証する。室内環境の改善のみならず、戸外環境、人的環境の改善を目指す。</p>
<p>食育(継続)</p>	<p>食物を栽培する楽しみを感じながら、収穫をし、食することで、野菜等苦手な食物が少なくしていきたい。自園調理給食を開始され、楽しく食が進むための環境を考える。</p>
<p>幼保連携型こども園として0～2歳児の適切な保育計画を立て実践する。(継続)</p>	<p>一人一人の子どもに合わせた育児担当制の保育で一人一人の日課を安定させて子ども達の情緒が安定して落ち着いて過ごせる保育を目指す。そのため、物的環境の向上と保育者の質の向上に努める。</p>
<p>新型コロナウイルス感染症対策を始め、衛生管理や健康管理を強化する。(継続)</p>	<p>新型コロナウイルス感染症対策を始め、園内での感染症対策として衛生管理や健康管理を強化する。ただし、一方であまりに園児の生活や経験を制約しすぎて保育の質の低下に繋がらないように配慮をする。</p>

6、学校関係者の評価

学校関係者評価については、現在、努力義務とされているが、本園ではまずは自己評価の充実をはかっている。学校関係者評価については、形式的にならず、しっかり機能するように時期を見て、学校関係者評価委員会を立ち上げたい。

7、財務状況

公認会計士西野吉隆の監査により、適正に運営されていると認められている。